＜古墳時代中期＞（図 25）

古墳時代中期は大王クラスの大規模古墳が出現し、一時期地方の古墳は数が少なくなる。大王クラスの古墳が出現したのちに、地方の大規模豪族の前方後円墳が出現し、大和政権との関係性を明確にする時期である。船来山においても、極端に古墳の数が減り、中期後半から再び出現し後期へと繋がっていく。

表 2　古墳時代中期の主な古墳

支群	番号	墳　形	特　徴	時期・出土遺物
V	81	造出し付き円墳	全長 25m、造出し部 4m（2013、2016 年詳細測量調査実施）	5 世紀末、埴輪片
V	68	円墳か	竪穴系横口式石室か（2013 年詳細測量調査実施）	81 号墳より古い可能性あり

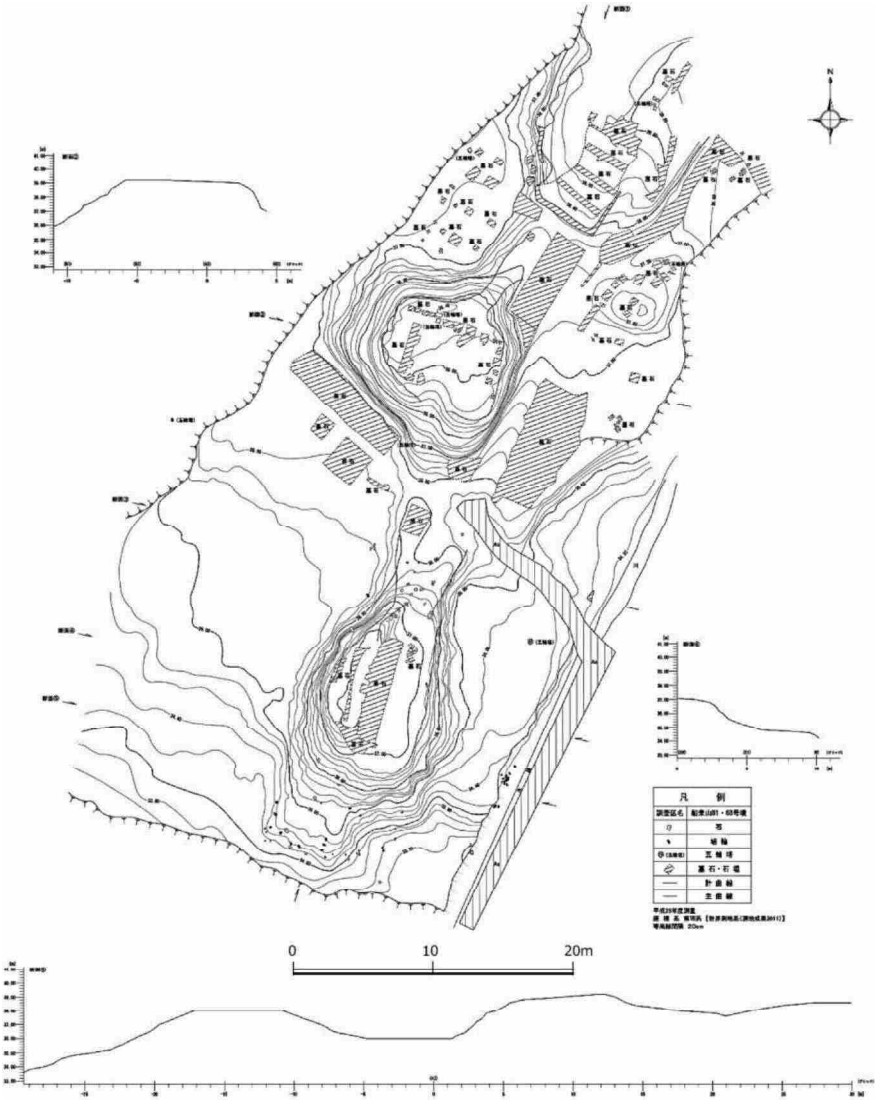


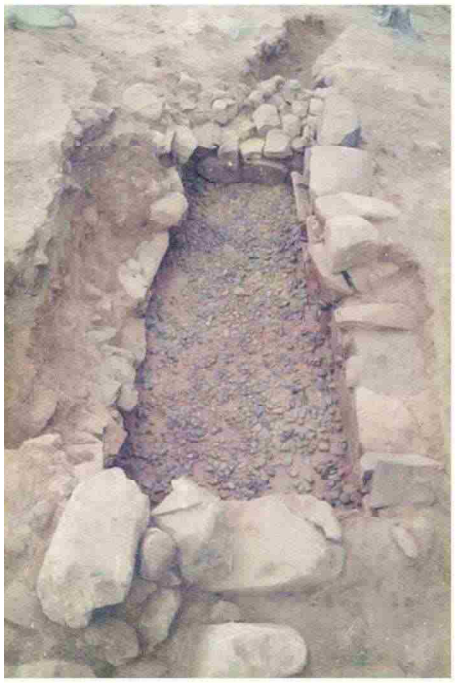
図 25　68 号墳、81 号墳　遺構図

＜古墳時代後期＞（図 26～図 29）

船来山古墳群の本巣市側の古墳は、全部で 194 基確認されており、うち後期古墳が 178 基確認されている。後期古墳はその形態によって細分され、6 世紀から 7 世紀後半まで、すなわち古墳が造られなくなるまでの間、間断なく造営されている。これら古墳の特徴としては、主尾根にある前期の前方後円墳等の大型古墳に寄り添うように後期古墳が造られていることである。図でも示すが、ただ単に近接しているのでなく、主軸も揃えて造営していることである。前期古墳が造営されてから 2 世紀以上経過し、氏族の首長墓とは考えにくいが、まるで首長墓のように寄り添って作られている。また、後期古墳の形として石室の構造による分類があるが、船来山古墳群の場合ほぼ全部の形態が見られるのも特徴の一つである。また、19 号墳・272 号墳・274 号墳は赤彩古墳であり、同一の支群に隣り合って造られている。

表 3　古墳時代後期の主な古墳

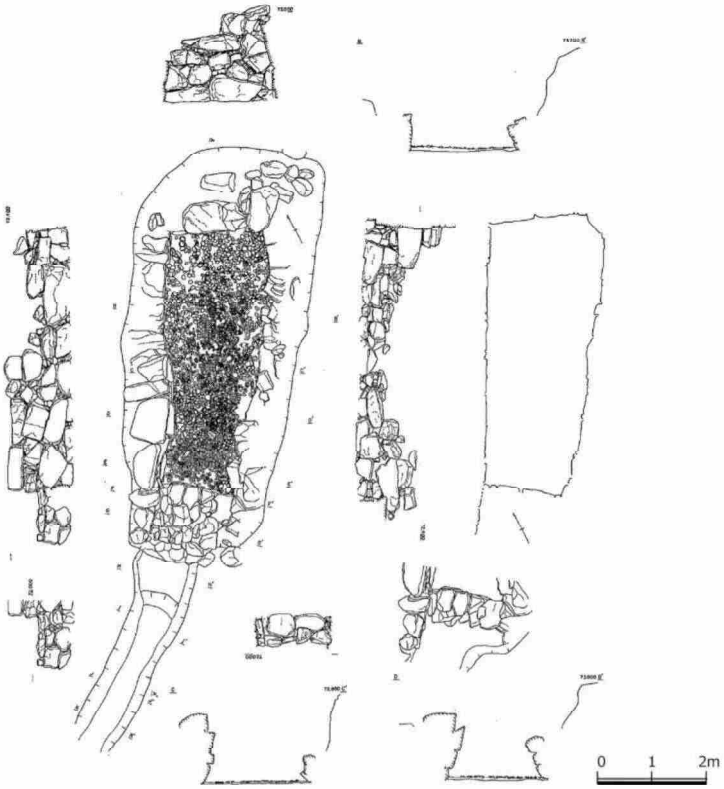
支群	番号	特　徴	時期・出土遺物
M	145	横穴式石室、棺台施設	5 世紀後半
O	272	赤彩、移築・復元 竪穴系横口式石室	6 世紀前半
O	274	赤彩、竪穴系横口式石室	6 世紀前半
	19	横穴式石室、無袖式、赤彩、棺台施設	6 世紀中ごろ
O	151	横穴式石室	6 世紀中ごろ　盟主的古墳
H	154	横穴式石室、組合式石棺、竪穴系横口式石室	水銀朱、盟主的古墳、素掘羨道、6 世紀中ごろ
N	22	横穴式石室、無袖式、竪穴系横口式石室	6 世紀前半
N	140	横穴式石室、無袖式、竪穴系横口式石室	盟主的古墳
G	29	横穴式石室、棺台	床にベンガラ、盟主的古墳、6 世紀前半
G	169	横穴式石室、竪穴系横口式石室	6 世紀後半　外護列石
O	280	横穴式石室、両袖式、棺台	6 世紀後半
G	133	横穴式石室、両袖式	
M	174	横穴式石室、両袖式	6 世紀後半
O	16	横穴式石室	6 世紀後半
O	273	横穴式石室、両袖式	7 世紀前半、石室からの時期推測
I	156	横穴式石室、両袖式	7 世紀前半、盟主的古墳
O	58	横穴式石室、両袖式	7 世紀前半、盟主的古墳
H	128	横穴式石室、両袖式	7 世紀前半
O	275	横穴式石室、両袖式	7 世紀前半
O	149	横穴式石室、棺台	7 世紀後半
O	266	横穴式石室	7 世紀後半
O	191	横穴式石室	7 世紀後半



出土当時の様子

トンボ玉出土

須恵器出土



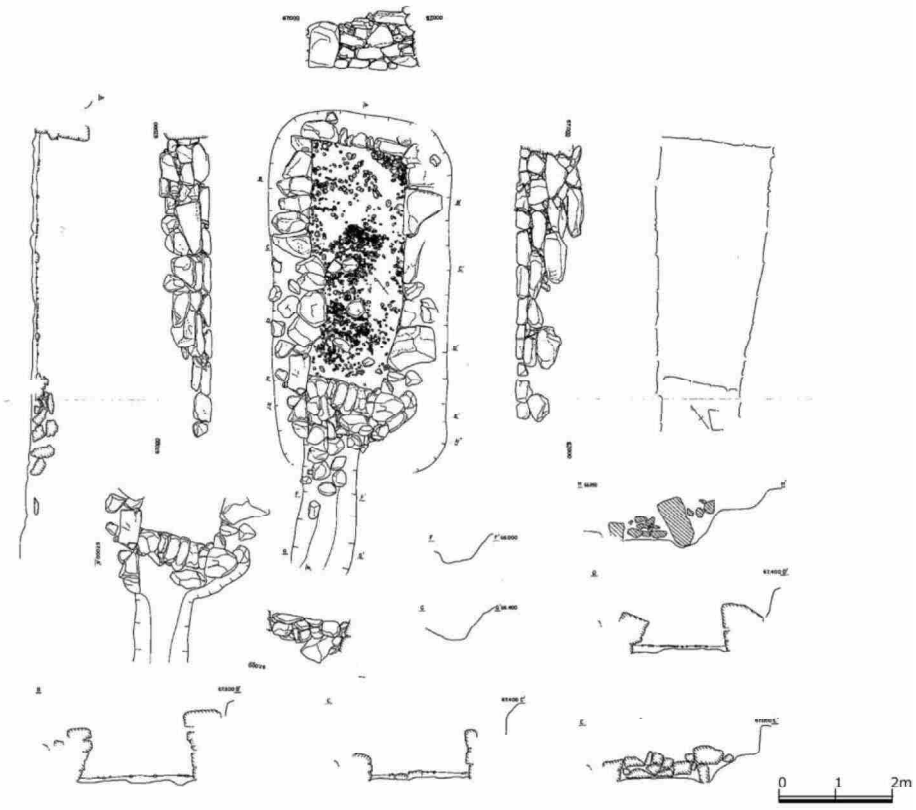
竪穴系横口式石室

図 26　272 号墳　出土遺物実測図

出土当時の様子

耳環出土

人骨（歯）出土



竪穴系横口式石室

図 27　274 号墳　出土状況写真及び遺構図

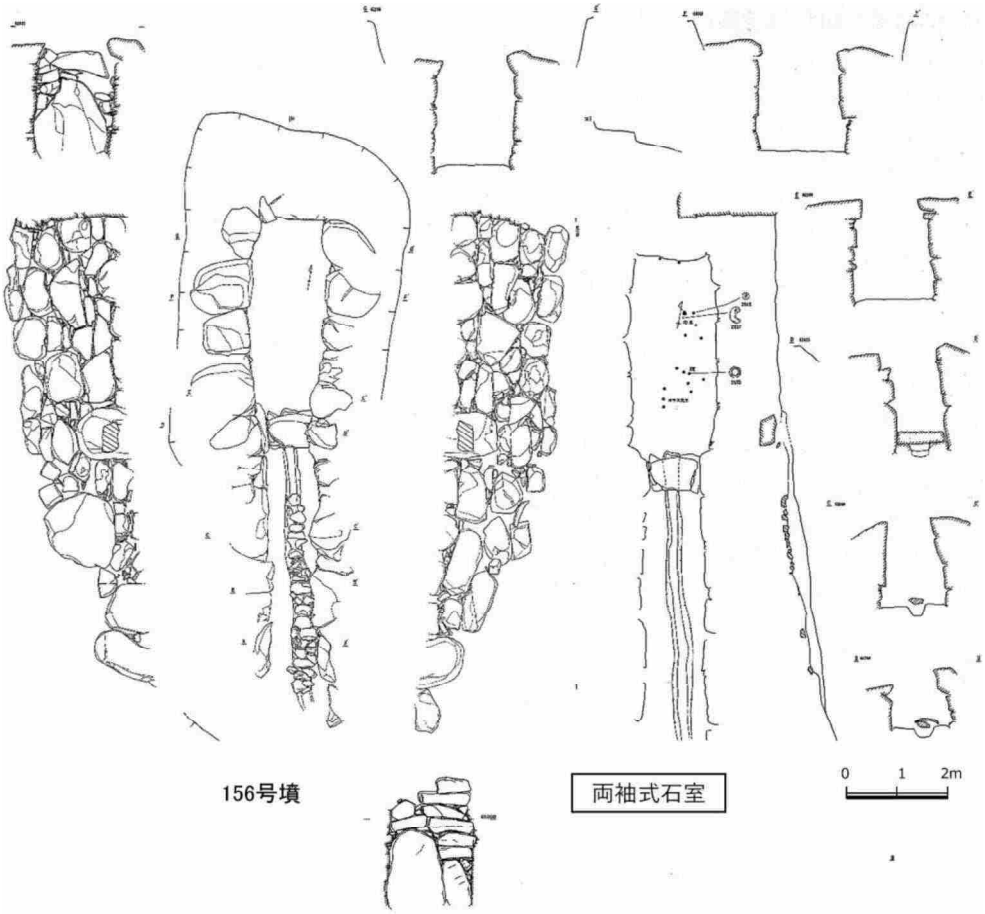
出土当時

鑿、須恵器出土

ガラス丸玉出土

無袖式石室

図 28　19 号墳出土状況写真及び遺構図



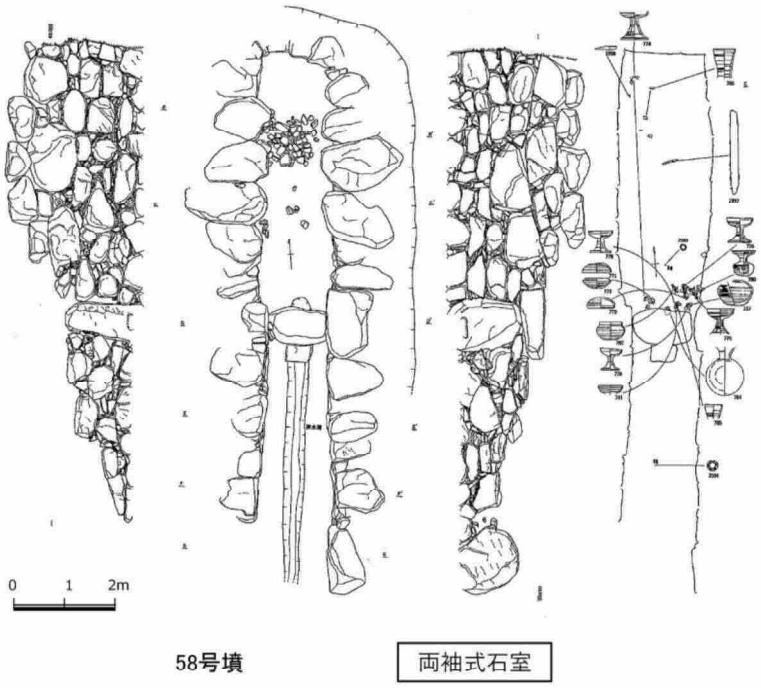


図 29　156 号墳及び 58 号墳　遺構図

＜奈良時代から平安時代＞

本巣の名前は、「本巣国造」「三野国造」などのように、早くは『古事記』の中に出てくる。平城京出土の木簡にも「三野国本須郡三野部」とあり、『和名類聚抄』にある本巣郡美濃郷に比定されている。さらに正倉院文書にも本須郡の名が記録されている。このように本巣は早くから知られた地名で、平地を利用した農業が盛んで開かれた土地であったといえよう。また、条里制が敷かれ、現在でも区画された地形が残っている。さらに、『続日本紀』では、尾張の国の人が大勢の新羅人を率いて席田郡を創建したと記されている。この当時は鎮護国家の観点から寺院の造立が盛んであった。本巣においても「弥勒寺廃寺」「席田廃寺」「文殊廃寺」が建立されている。また、平安時代中期に成立した『枕草子』『源氏物語』には「催馬楽」の曲「席田」が取り上げられるなど、宮中においても本巣は認識されていた。

＜中世＞

「糸貫川」「席田」「舟木山」は、歌枕として認識されている。『後拾遺集』『新勅撰集』『藤川紀』などに載っている。

中世を通じて莚田荘をはじめとしていくつかの荘園が営まれていた。本巣は優良な農地でもあり数々の有力な貴族や寺院、武士の所有等もあり複雑な支配権が成立した。

戦国時代は美濃国主土岐氏やその家臣斎藤氏が支配し、船来山には斎藤道三に追われた土岐次郎頼武が「席田の砦」を築き、祐向山城の前線基地としての位置づけが指摘されている。

この時代に古田織部が本巣に生まれ、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕え千利休の茶道の継承者として活躍、また茶器や作庭でも名を遺した文化人が出るなど、船来山周辺は文化的な交流も活発に行われた。

＜近世＞

享禄 3(1530)年の根尾川の大洪水で、これまで糸貫川として本巣の中心部を流れていた川の河道が変わってしまった。そして、これまでの河道を利用して席田用水を開削し農業用水とした。しかし、優良な水田地を守るために、たびたび水論がおき、100 年以上にわたり争うことになった。この争いは、氾濫原の開墾や入会地の権利争いもあったが、根尾川の取水口や水路敷の改修、広域な農地開発が行われ、席田用水をめぐるあらたな景観が創出されることになった。いろいろな物資がここから送られている。扇状地の排水を活用した果樹、根尾川のアユ、都市近郊菜園の発達などで、現在に続く生産風景も近世期に成立したと考えている。

江戸時代には、船来山山麓の上保村は旗本大嶋家の領地となり、船来山西麓周辺に代官屋敷等が置かれた。大嶋雲四郎義方（大嶋家 9 代）は、弥勒寺墓地に葬られた。その他の郡府村、三橋村、春近村等は加納藩領となった。名古屋城築城の際には、船来山古墳群は石切丁場となった。古墳の天井石や側壁が抜き取られ、名古屋城の石垣に利用された。

＜近代＞

蓑虫山人が船来山を訪れ、船来山からの眺望風景を描き残している。これも船来山や糸貫川が歌枕として有名であったところからであろう。この絵の中には、赤彩古墳が出土した O 支群から、濃尾平野を見下ろした風景が描かれている。図中の建物は、かつては O 支群の山麓にあり、今は廃寺となっている

正傳寺である。現在も田畑、柿畑が広がる平野には、席田用水が流れ、帆掛け船が運航している様子が描かれている。明治末期には富有柿の栽培が始まり、大正時代に開墾が進み船来山周辺は柿畑となり、地域の特産品となった。現在の集落の風景と比べてみても、席田用水の位置はほぼ変わっておらず、蓑虫山人が見た風景を今に伝えている。明治 21（1888）年、明治政府により「市制・町村制」が交付されると、船来山周辺は「席田村」となった。「席田村役場」は、船来山から 1500m 南の「席田小学校」の隣に置かれた。昭和 31（1956）年に「糸貫村」ができるまで、村役場は席田小学校の隣に置かれ、中心であり続けた。

図 30　蓑虫山人作 妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図（岐阜市歴史博物館蔵）

以上のように船来山周辺の歴史を概観したが、縄文時代草創期より人々の足跡が認められ、古墳時代には前期古墳に寄り添うように群集墳が営まれた。古墳の形態や埋葬物の変遷から、中央政権勢力との関係を推察されるほど先進的な文化に発達していた。席田郡が建郡され、船来山山麓に「弥勒寺」、「席田廃寺」が造営された古代から中世は、歌枕になるなど雅やかな側面が現れ、中世には荘園が発達し、有力貴族や寺院の所有となった。P.47 の「船来山古墳群周辺の遺跡地図(図 33)」と照合すると、船来山古墳群周辺の古代の遺跡群（弥勒寺跡、席田廃寺跡、席田郡家推定地、席田郡府遺跡、春稲神社遺跡、元正寺遺跡、上保本郷遺跡等）の多さが一見できる。また条里制も施行され

図 31　現在の船来山周辺の集落風景

たが、昭和 40 年代の土地改良においても、それまでの区画をもとに施工されたため、古代、中世の田園風景も、現在の田園風景とそれほど相違ない可能性がある。

戦国時代は斎藤道三や土岐氏の勢力によって支配されるが、船来山山頂に席田の砦（船木城跡）が築かれるなど、船来山は歴史の中心であり続けた。古田織部のような文化人も現れる等、文化面にも影響力を持つ土地であった。近世になると農業用水の整備や農地の大規模開発等により船来山周辺は新たな景観が創出されるが、名古屋という大都市圏を市場に農業が盛んになり、富有柿等の特産品は今でも高い生産能力を持っている。このように船来山とその周辺は中部日本の歴史を特徴的に現代に伝えている。

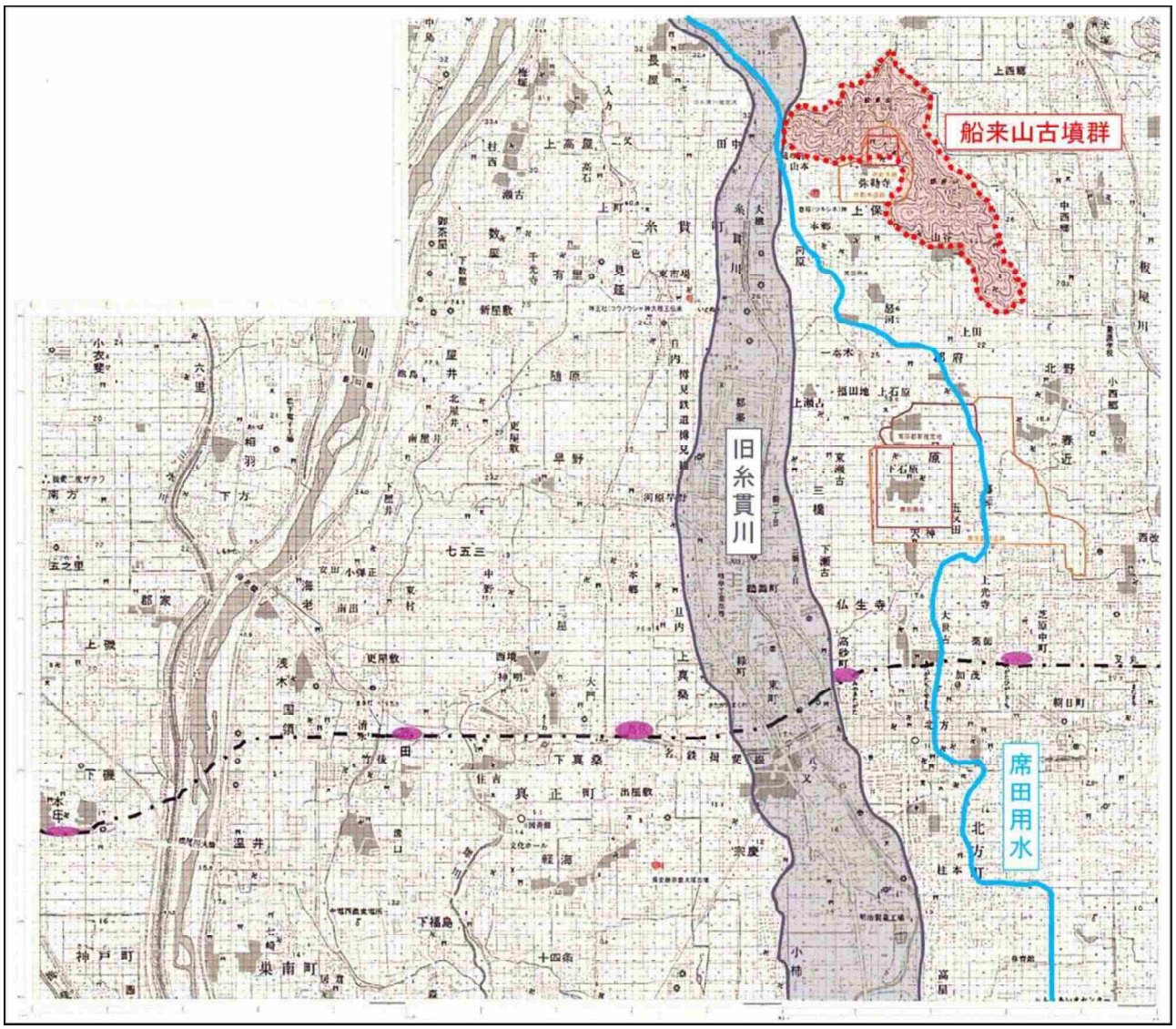


図 32　旧糸貫川、席田用水、東山道推定ルート図

※ ピンクの網掛けは仙道（せんどう）地名が残る所。点線が東山道推定ルート。

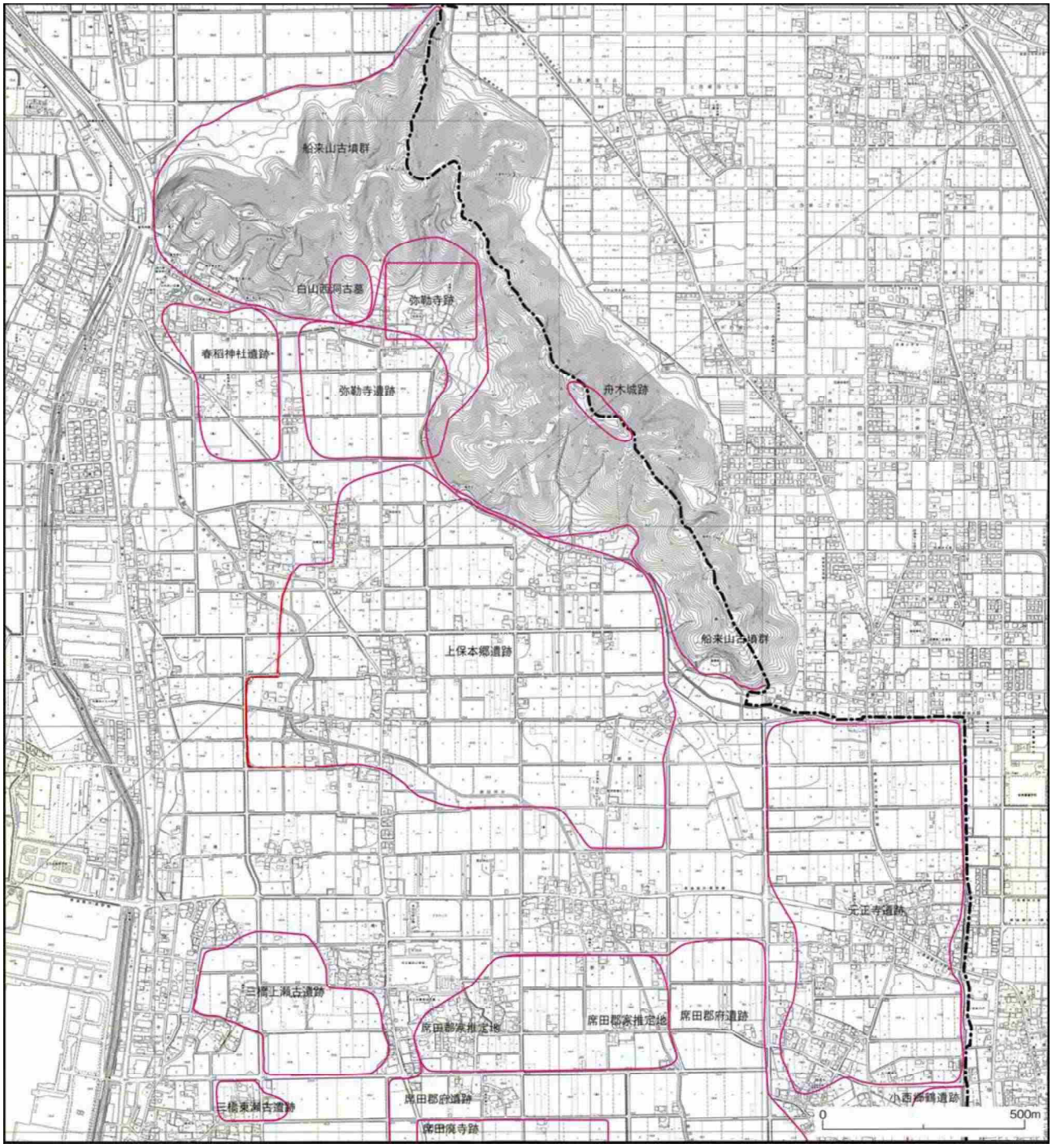


図 33　船来山古墳群周辺の遺跡地図

（４）自然的調査の成果

＜立地＞

船来山古墳群は、本巣市の中心部の独立丘陵に位置する。本巣市は、東西約 17 ㎞、南北約 43 ㎞、総面積 374.57 ㎢で、北部は福井県との県境を接している。また、東部は岐阜市等と接し、南部は瑞穂市、西部は揖斐川町・大野町等に接している。交通は古代の官道東山道と大河川であった旧糸貫川が交差する交通の要衝の地であり、北陸に通じる北部山岳地帯への玄関口でもある。船来山は、標高 115ｍから 64ｍ、東西 2 ㎞、南北 600ｍの独立丘陵で、濃尾平野の北端部、根尾川の左岸に位置する。本巣市は、根尾川が山地から平野部に移る山口集落付近を扇状地の頂点として形成された根尾川扇状地に位置し、船来山周辺では古くから水田や果樹園が広がっている。

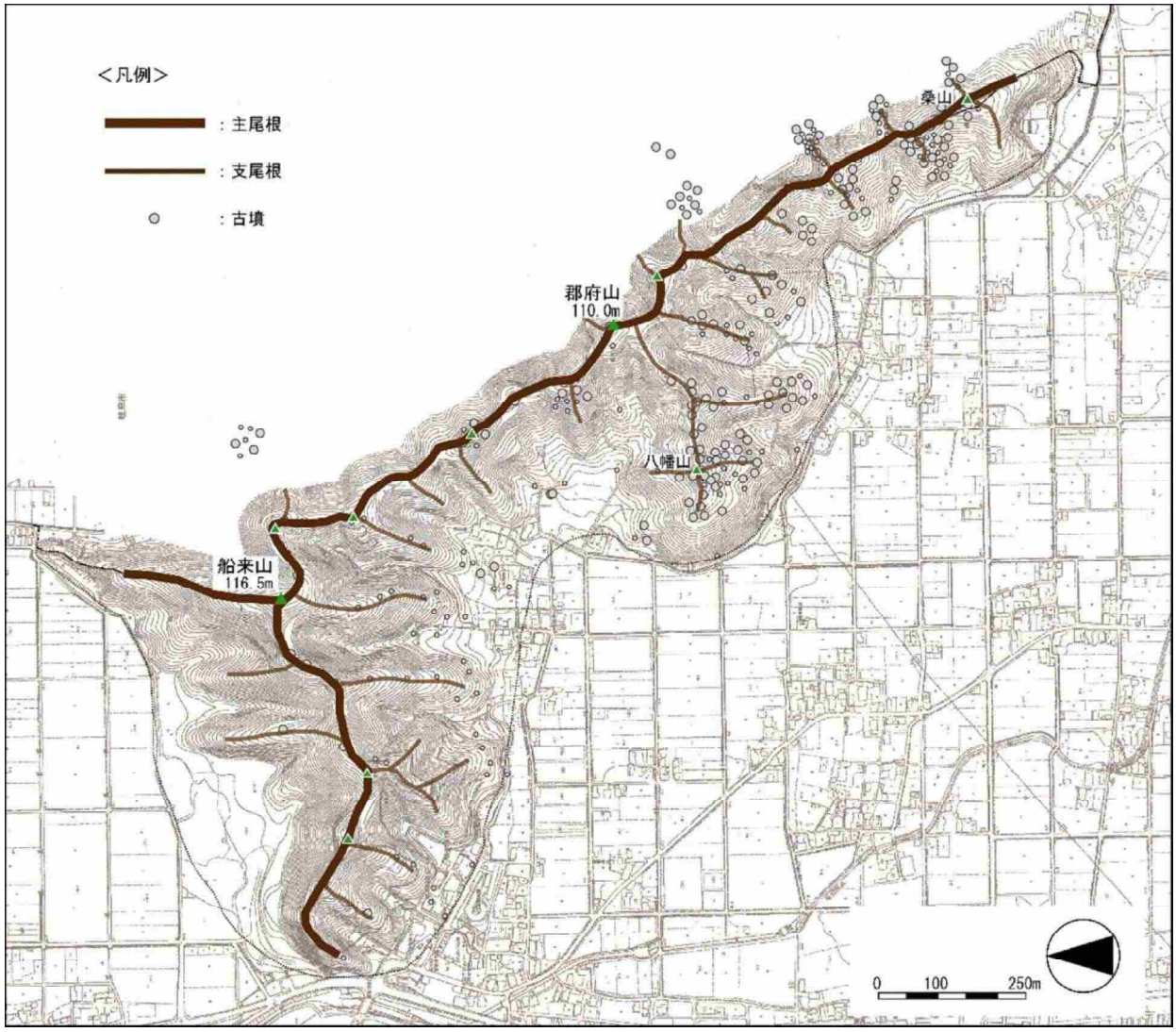


図 34　尾根の構成

＜地形・地質＞

船来山は南東から北西、北西端で北と西方向に延びる主尾根からなり、この主尾根よりさらに支尾根が舌状に延びている。船来山の最高峰は 116.5ｍの船来山山頂で、このほかに郡府山 110.0ｍ小ピークや八幡山、桑山といわれる小山の連なる丘陵となっている。

地質的には、古生代地層の硬砂岩が主体で、一部に軟砂岩系岩が分布している。八幡山以南は青色硬砂岩が多く、各所で採石の跡が確認されている。

表層地質は、北部の船来山と中央部の八幡山以南に 2 分し、それぞれ根尾統、外山統としている。その土壌断面を比較すると、角礫の混ざり方が多少異なる。根尾統には角礫が極めて少なく、外山統には多い。

＜水系＞

揖斐川水系根尾川が、市西端を流れている。根尾川と船来山の間に支流の糸貫川が流れていたが、1530 年の大洪水までは、糸貫川が藪川（現在の根尾川）の本流であった。このため、船来山南部の扇状地には多くの旧河道や荒廃湿地、自然堤防が残されている。このような扇状地という自然条件は、平地に古墳を造らせなかった要因の一つである。

＜一井大堰＞

上記のように根尾川は 1530 年の大洪水により、山口村より西南の村々を流して新しい流れを作った。そのため、農業用水が足らなくなり、席田井組により根尾川を山口で堰き止め「一井大堰」を作り、農業用水の取入れを始めた。その結果、農業用水をとれなかった真桑井組は水論を起こし、席田井組と対立してきた。結局結論が出ず、1641 年に 6 対 4 の割合で水を入れることを幕府が決定した。その後も運営その他で争いが起きたが、1944 年根尾川改修で糸貫川を完全に締め切り、「水門」を設けて席田用水として利用されるようになり、水論は決着した。

＜船来山の谷水系と山崩れ＞

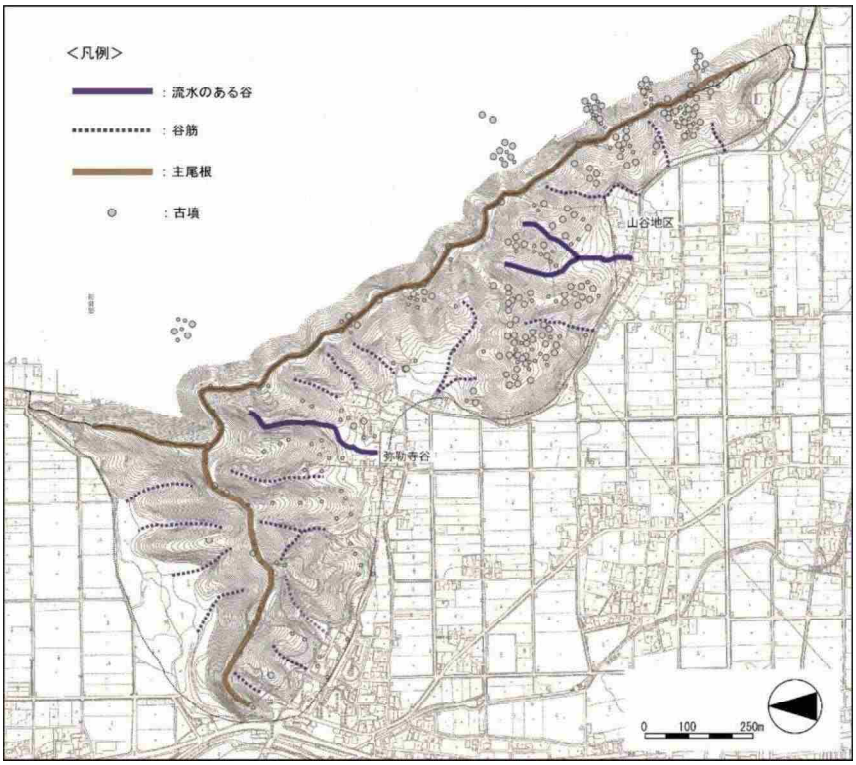


図 35　船来山の水系図

船来山の地形を見ると、小ピークが連なり、そこから谷が細かく入り込んでいる。この谷筋は、雨水を集めて流水ができる。特に弥勒寺谷と山谷地区の谷はよく流水の確認ができる。また、山の伏流水として湧水が出るところもあり、共同井戸としての利用も見られた。

＜災害＞

昭和 51 年 9 月 11 日山谷地区北洞では、大規模な土砂災害が起きた。大型台風によって降り続いた雨が直接の原因で起きたが、この区域の林相は柿 4 割、雑木 6 割で、耕作中の畑も多かったが、崩落上部では放棄された柿畑や自生する山芋の掘り取り穴が雨水で楔となり保水限界を超えた土砂が崩壊したものとされている。

＜植生・植物相＞

船来山の基本的で、特徴的な植生はコジイ林である。しかし、明治末期から始まった富有柿の栽培により、広い範囲が柿畑として開拓された。

航空写真で土地利用の変遷をたどると、昭和 50 年代ごろまでは柿畑による開発が主流で、盛んに柿栽培がおこなわれていた様子がわかる。しかし、上記の災害にも見られるように、すでに昭和 51 年には柿畑の荒廃が見て取れるにも関わらず、他地区では柿畑用開拓が進んでいた。それも、昭和 60 年代の写真では柿畑が徐々に減少していることも見て取れる。柿畑は山から平野部へと移っている。

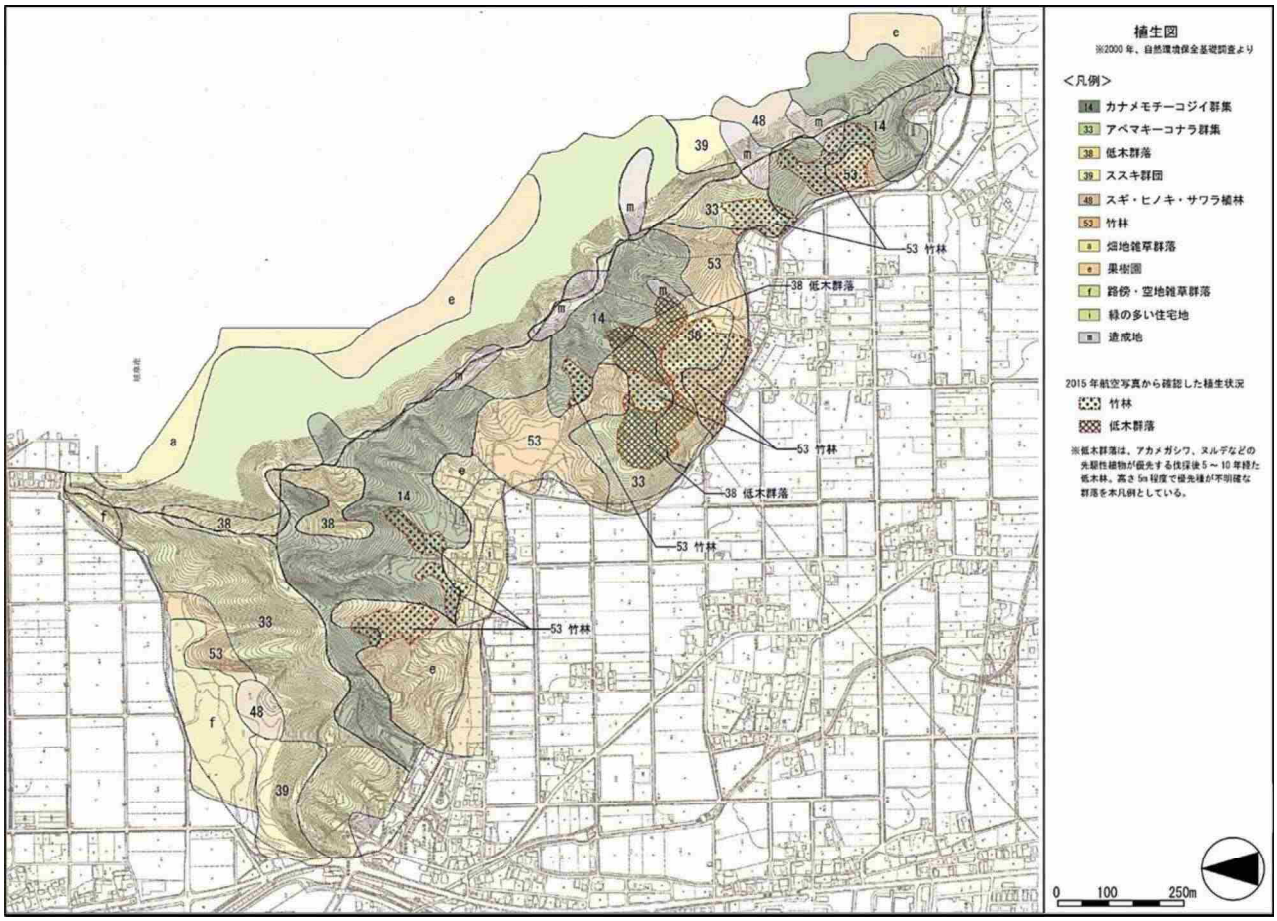


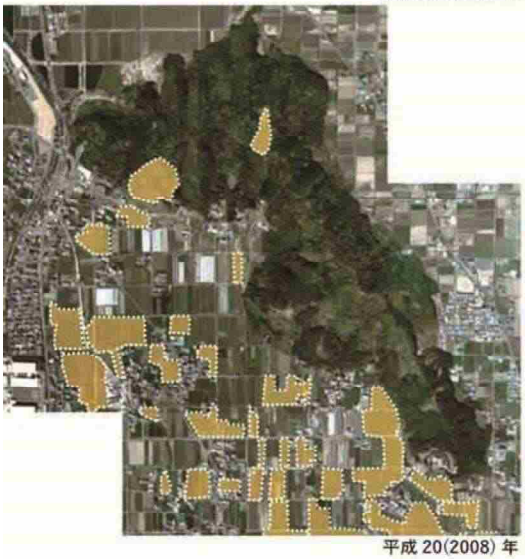
図 36　船来山の植生図

昭和 23(1948) 年

昭和 50(1975) 年

昭和 57(1982) 年

昭和 62(1987) 年



平成 20(2008) 年

・航空写真より、柿畑の土地利用と思われる範囲をトレースした。
・昭和 50 年代頃まで柿栽培が盛んに行われていたことが分かる。その後徐々に減少し、2008 年時点では一部の斜面や山麓に残すのみとなっている。
・一方で、船来山南麓平野部での柿畑は、現在も持続している様子が分かる。

※ベースの航空写真は国土地理院ウェブサイトの地図データを使用した。

国土地理院ウェブサイト
http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1

図 37　船来山周辺の柿畑の変遷